

私の工夫

生徒を「学びの主体」にするために

県立倉敷青陵高等学校

指導教諭 三村 美紀



1 はじめに

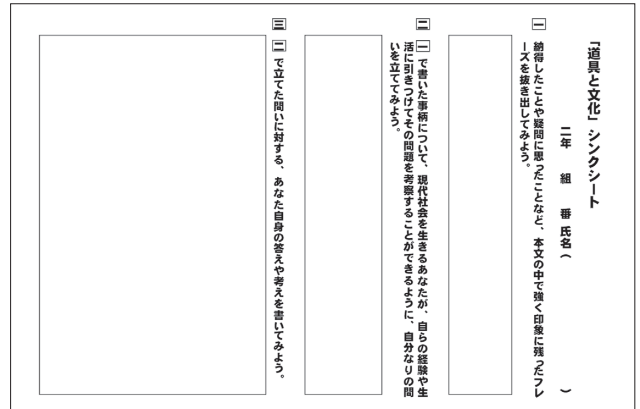
平成24年、岡山大学教職大学院に派遣されたことをきっかけに、授業観が大きく変わる経験をした。同じ院生となった先生方の模擬授業で、算数や理科の授業を子どもの立場になって受けたとき、小中学校の先生がいかに発問や教具を工夫して子どもに関心を引き出すようにしているかに気がついた。また、協同学習に出会ってその理論と方法を知り、多くの授業を参観したことよって、子どもの学びの質を見取る視点を与えられた。校種や教科を越えて授業を体験したことで、自分の授業に足りなかったことを発見できた。「これまでも調べ学習や発表などを少なからず取り入れてきたが、生徒に活

動の目的や意義を十分に伝えられていなかったのではないかと、「生徒は予習して授業に臨んでいるのだから、分かって当たり前という思い込みで理解度まで深く踏み込んでいなかったのではないかと」——そんな反省から今は、生徒の抱く疑問を見逃すことなく、それを出発点に授業の展開を構成するよう心がけている。「いかにして学びの主体を育てるか」が授業づくりのテーマである。

2 日常的な取組

(1) 事前チェックシートとシンクシート

単元のはじめに生徒に「事前チェックシート」を配布し、予習の段階で疑問に感じたことや気づいたことを書かせている。生徒自身



シンクシート

がわかることとわからないことを区別し、学習材に向き合う構えをつくることができると同時に、クラス全体の理解度を把握することで丁寧の説明する必要があるのはどこか、到達目標をどこに置くかといった授業の重点や焦点を予め設定することができる。その上で、読解を深めるための問いをいくつか立て、「シンクシート」を作成する。生徒がわが事として作品を読み、自らの生き方・在り方を考える時間を持てるよう、大きな問いを立てられるかが鍵にな

る。「THINK」という語を用いるのは、自分の頭で思考し、自分の言葉で表現することを要求するからである。

(2) 個人考察と相互交流

シンクシートの解答欄は、3〜5行程度あるいは10行以上の分量を書けるくらいの幅で作り、まず生徒に自分(個)の考えを鉛筆で書くようにさせる。次にペアやグループでシートを交換し、互いに読み合ったり伝え合ったりして、級友(他)の考えを知る。その後、クラス全体の討議やこちらからの説明をし、気づいたことやわかったことを色ペンで書き足すように習慣づけている。この時生徒は、



班討議の発表

言語活動を通して理解を深め、対話によって協働の知を獲得しているはずである。

3 学校設定科目 「国語研究」の実践

本校の学校設定科目「国語研究」は、理系の3年生で国語の2次試験がある大学を志望する生徒が選択する。新設の昨年度は17人の生徒が選択し、私を含めた3人の教員がチームティーチングで指導に当たった。授業を構想する際、入試のための学習に終わるのではなく、次代を担う科学者や研究者になるだろう生徒たちに、高いレベルの読解力や表現力、倫理観や人間性を身につけさせることを目標にした。

1学期に短い評論を6編読んだ後、2学期は新書一冊を全員で読んだ。その終章を題材に班討議を行い、考察した内容と過程の発表全体討議と振り返りの論述を行なった。題材とした書籍『ポスト資本主義―科学・人間・社会の未来』は、近代科学と資本主義がたどってきた道と矛盾をはらんだ現状を

論じ、定常化社会への志向を示唆している。4つに分けた班の議論はどれも白熱し、それぞれに違った角度・視点から課題を切り取っていた。授業全体を通して、生徒は自然と人間、宗教と科学、市場経済の拡大と環境資源の保全など対立する価値の葛藤を経験し、これからの科学がどうあるべきかを自己の問題として考えることができた。「国語」という授業を通して、現代社会が抱える諸問題について、異なる価値観を持つ他者と議論し、その解決に向けて対話による合意を形成する。このような姿勢を獲得できれば、大学での学



新書を読む

修や社会参画の基盤になると思っている。一年間を通して、生徒の思考や議論の深まりとともに人間的成長を間近に見ることができ、国語教師としての幸せを感じさせてもらった。ともに授業をつくった生徒達に感謝したい。

「新書を読む」学習指導案抜粋

【題材】

岩波新書 広井良典著『ポスト資本主義―科学・人間・社会の未来』から 終章「地球倫理の可能性―ポスト資本主義における科学と価値」

【目標】

- ・文章の構成や主題をとらえ、筆者の主張を的確に理解する。
- ・近現代に関する新たな視点を獲得するとともに、現代社会の抱えるさまざまな問題に真摯に向き合う態度を養う。
- ・自己のものの見方や考え方を深め、論理的に表現する力を高める。

【題材観】

資本主義の歩みを示しながら富の偏在や資源の限界など深刻化する課題を明らかにし、持続可能な社会を構築するための科学のありようを考察している。21世紀をリードする科学者・研究者となることが期待される生徒に、当事者意識を持った読解と考察をさせたい。

【活動】

- ①新書を通読し、終章を精読する。

- ②任意の班をつくり、終章を読んで考察したことを討議する。
- ③班ごとに考察・討議の過程を発表した後、全体で討議する。
- ④班と全体の討議を経て、自分の考えがどのように変容したかを論述する。

4 おわりに

倉敷青陵高校は今、「高質な学力の養成」を学校経営目標の第一に掲げ、授業改善・指導力向上に努めている。大学合格をゴールにした受験学力にとどまることなく、将来にわたって学び続けるアクティブラーナーを育てるため、各教科の基礎・基本から思考力・判断力・表現力、さらには主体性・多様性・協働性をも含む21世紀型学力を伸ばす授業を展開する。これが日々、私たちが向き合っている命題である。

参考文献

- T. E. ラファエル・L. S. パルド・K. ハイフィールド著、有元秀文訳『言語力を育てるブッククラブ デイスクッションを通じた新たな指導法』（ミネルヴァ書房）
- 杉江修治著『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』（ナカニシヤ出版）